

次世代に向けた臨床検査を考える ～用手法から自動化そして・・・～

◎井本 祐司¹⁾

福岡大学病院¹⁾

史実によると、診療に必要とされる臨床検査は、明治時代に始まり、医師自身によって行われていたが、戦後、連合軍総司令部（GHQ）の指示により国立病院へ米国式病院管理学が導入され、臨床検査の中央化のため研究検査科が設置されるようになった。1958年に「衛生検査技師法」が初めて制定され、1970年には検体検査のみの生化学検査に生理学的検査と採血が加わった「臨床検査技師、衛生検査技師等に関する法律」へ、その後、2005年に「臨床検査技師法」へ改正された。医療の普及と共に、検体検査の検体数は増加の一途をたどり、そこに働く臨床検査技師は慢性的な不足状態を呈した。この現状を打開する方法として、自動分析装置が臨床検査の場に導入されると、著しく普及し、用手法から自動分析法へと移行した。1970年代にはいると、ミニコンピュータが検査室に導入され自動分析装置または装置のデータ処理に始まり、搬送ラインシステムの導入、更には、電子カルテシステムが急速に普及し始めた。現在では、病院全体のシステム化の完成過程にあるといえる。

今、医療を取り巻く状況は大きく変化している。医師の長時間勤務への対策として2024年4月に医師の時間外労働の上限規制、少子・高齢化に伴う人口減少により、外来患者数は2020～25年にかけて、入院患者数は2030～35年にピークアウトする地域が多くなると想定されている。このような変化の中、臨床検査技師には、その専門性を活かし、多職種との連携や検査室以外での診療支援が求められている。本シンポジウムでは、臨床検査の変遷を振り返り、これからの時代に求められる臨床検査技師像について述べていく。